蒼天句会

毎月第二木曜日午後一時から
於　美浜公民館

講師	秋惜しむページの角を小さく折り	明海	公子
	空想は自在な遊び鳥渡る		
一	巫女の舞ふ秋の芝山植樹祭	入船	隆彦
	茜空初冠雪の富士の山		
二	秋暑し紅蓮の雲のひしめきぬ	市川	佳代
	鰯雲荷物小さく旅に出る		
三	背に眠る娘重たき花火会	舞浜	、美保子
	紺袴鏡に映えて卒業す		
四	三番瀬ゆらゆらよぎる夏かもめ	美浜	詔子
	夕焼け雲共に老いてるクラス会		
五	でで虫はホルンの形スローモー	入船	信江
	かな文字の淡き墨色吾亦香		
六	ふらここの揺れてる空は鰯雲	美浜	、ムツミ
	日月は時空の旅ぞ秋深し		
七	昼寝覚め妣とつながる糸電話	入船	輝明
	新酒酌む考を七歳越えにけり		
八	金婚の次への船出ことし酒	入船	婦紗子
	日向ぼこ妣と語りつ爪を切る		
九	荒神輿担ぐ若衆コップ酒	美浜	繁一
	水澄むや漏らしてならぬ隠し事		
十	水鏡代田に映る山青し	美浜	久恵
	炎帝の強気に民の疲弊かな		
十一	湾奥とふ袋小路や大南風	入船	孝志
	武蔵野の青き水脈額の花		
十二	湧水の流れを集む小滝かな	日の出	静江
	わたつみの海に揺蕩う星月夜		
十三	肺葉の奥に緑が充ちてくる	日の出	重子
	研ぎあげし出刃の切っ先涼新た		
十四	往時知るキネマ通りの余寒かな	高洲	洋一
	補聴器に少年の日の蝉鳴けり		
十五	麦藁手対の茶碗や額の花	北栄	鎮夫
	リラの花門扉に透ける異人館		